

第廿五講 義とせらるゝ事の結果（二） 第五章の研究続き（十月十六日）

羅馬書第五章の一節―五節は或意味に於て崇高なる詩といふべき箇處である、もとよりパウロが専門の詩人であるからではない、凡そ偉大なる信仰の士は宗教家にして哲學者にして且詩人であるからのことである、前講に於て我等は第四節までを窺つたのであるが、實は三節―五節が一の成文を爲してゐるのである故、茲に爲す所の第五節の研究は前講を補足するものとなるのである。

まづ五節の初には「希望は差を來らせざるを知る」とある、こは此希望が必ず實現せらるべくして決して空望に終らぬことを意味するのである、此世の事に於て人々は種々の希望を抱くを常とする、併し乍ら其希望の多くは實現せられずして其人々は終に差を抱くに至るのである、恰も砂漠の溪川を望み慕ひしテマの隊客、シバの旅客が其枯渴せるに會して「彼等これを望みしによりて愧耻を取り彼處に至りて其面を赧くす」る類である（ヨブ記第六章）、しかし乍ら基督者が迫害を経て練達し、練達のために生れし希望は決して空しく終るものではない、かの時に至つて必ず實現成就せらるべきものである、此事は基督者が自から能く知つてゐるのである。

然らば問ふ、この希望が空望として終らぬ證據は何處にあるか、答へて云ふ「こは我等に賜ふ所の聖靈に由りて神の愛われらの心に灌げばなり」（五節後半）と、今これを原意のまゝに充分に且つ正確に譯出せんとせば左の如くに改譯すべきものである。

こは我等に賜はりたる聖靈に由りて神の愛われらの心に灌がれて残ればなり、

「我等に賜はりたる聖靈」である、聖靈を賜はりたる事は基督者にとりて過去のことである（勿論現在を除外しないけれども）、そして此聖靈に由て神の愛が心に灌がれて今残つてゐるのである、そして此事が實にかの希望の差を來らせざる事の證左たるのである、凡そ希望なるものは其本性上將來に係はることである故、愈よ其時が來らなくては此希望實現の成否を完全に知る事は出來ない、しかし乍ら神の榮を望む希望の確實なる事は、基督者の靈魂の上に實得せられし過去現在の心的經驗が優に之を實證してゐるのである、聖靈我に降りて神の愛大水の如く沛然<sup>はいぜん</sup>として我心に灌がれ、其愛が今も止まれる事は我心の活ける實驗として固より疑ひ得ぬ事實である、此事實を一方に抱きながら與へられし希望の空無として終らんことを他方に思ふことは不可能それ自身である、愛をゆたかに我に注ぎ給へる神が空しき希望を與へて我等に差を取らしめ給ふことのあるべき筈がない、神の愛は我等をして彼を信ぜしめる、彼を信ずれば彼の與へし希望の必ず實現さるべきをも信ぜねばならぬのである。

パウロを嘲る者は彼に向つて云ふたであらう、汝は歡喜と希望に充ちてゐる、これ大に可し<sup>よ</sup>、されど汝の窮乏孤獨の實狀を如何、汝は希望に生くと廣言して憚らないが、抑も希望なるものは其時にならずしては成否のわからぬものである故、汝の希望も亦遂に世に數多あるその如く空無として了る者<sup>おわ</sup>ではあるまいかと、しかしパウロは之等の言を一蹴し去るが如くに、神の愛ゆたかに我に灌がれし故我は與へられし希望の必ず實現さるべきを信ずと答へるのである、簡單なれど力強き、意味の頗る深き、多年の實驗を壓搾したる貴き言であると云はねばならぬ、

此意味に於て信仰は純主觀的の者である、賜はりし所の聖靈によりて神の愛をそゝがれて今も残ることを心に

於て實驗するのである、この實驗ある上は遂に完全に救はれて榮化の域に達すべき事を疑はんとするも疑ひ得ないのである、かく自己の確信であり、實驗であり、純主觀のことであるが故に他よりの批評、攻撃、嘲罵（ちやうば）の如きは我に於て何等問題とならない、恰かも岩に向つて放たれし矢の如く矢はたゞ撥ねかへる外ないのである、又基督教二千年の歴史に於て、信仰上の迫害が毫も信徒の信仰を擾（す）すことなくして却て益々熱心を煽りし如き固より然かあるべき事である。

神に救はれし證據は何であるか、或人は事業の成功であると云ひ、自己の致富榮達を以て救はれし證據となす人がある、信仰の結果として勤勉を生み爲に致富榮達に至る人がないとは云へぬ、併し乍ら詐偽（きげつ）と詭譎（きげつ）とを以て致富榮達に至る人もある、或は又幸運が成功をもたらす事もある、故に救はれし證據を此世の成功に置くは大體に於て誤つてゐる、又健康を以て救はれし證據となす人もある、信仰は健康の源たる心の平和を生む者である故に救はれし證據である場合もないではない、併し乍ら世には無信仰であつても天賦の強健なる肉體に溢るゝばかりの健康を盛つてゐる人もある、又神に救はれし者にも病弱を免かれぬ場合もある、故に健康を以て救はれし證據と見ることは不正確である、その他概ね此類である。

神に救はれし者は此救の完成さるべき希望を抱く、即ち榮化完成の希望である、然らば救はれし證據又救の完成の希望の確實なる事を證する證據は何であるか、これ成功にあらず健康にあらず其他一切の外部的徵證にあらず、心中深く抱かるゝ所の聖靈（せいりやう）に由る神愛の實感である、我等に賜はりし所の聖靈に由り神の愛ゆたかに注がれて今残ることを如實に味ひたること、此實驗が最確實なる希望の證據である、救はれしことの證據であると共に

救の完成せらるべき事の證據である、即ち希望の確實性を證する者である。

そして此貴き實驗は患難即ち迫害を経て來るものである、迫害は忍耐―練達―希望の母であると共に又神愛感得の實驗を生み起す所のものである、茲に於てか患難迫害の基督者に取りて益々歡迎すべきものたることを知るのである、そして迫害と云へば昔ありし謂ゆる迫害の類に限らず信仰のために受くる一切の不利益、苦痛損害、犠牲を指すのである、此種の迫害は今も頗る多い、否信仰の在るところ必ず此迫害が伴ふのである、併し乍ら迫害の結果として希望生ずると共に、又聖靈降りて神の愛われに充ち以て此希望の差はちを來らせざる事を示すのである、されば歡迎すべきかな、迫害苦難！これ我等の完成せらるゝために是非とも來らねばならぬもの、即ち貴き天の使である。

聖靈を賜はりて神の愛來り止まる、聖靈の我等を導くは即ち聖靈に由りて神の愛が我等に灌がるゝ事である、六節以下パウロは進んで尚ほ神の愛の内容を説かんとするのである、先づ六―八節は左の如くである。

- (6) 我等尚ほ弱かりし時キリスト定まりたる日に及びて罪人のために死に給へり、(7) それ義人の爲に死ぬる者殆ど稀なり、仁者のためには死ぬることを厭はざる者もやあらん、(8) されどキリストは我等のなほ罪人たる時われらの爲に死に給へり、神は之によりて其愛を彰あははし給ふ。

キリストは罪人のために十字架の死をとり給ふた、これ即ち神の愛である、神の特別の愛が之に於て現はれたのである、之を人間の社會に於て見るに義人のためなりとて我生命を献ぐるものは皆無と云ふべきほど稀である、仁者は義人と異なり慈悲とと救恤めはれみとを以て人に對する者である、されば其愛に感激して或はその爲に生命を献ぐ

る者も少しは在るかも知れない、さはれ固より稀有の事である、然るにキリストは仁者のために死したのではない、又義人のために死したのではない、實に罪人の爲に死したのである、罪人のために我生命を與へて罪人に生命を與へたのである、人は己に仁を施した人のためならでは生命を與へ得ない、併しそれすら頗る稀である、然るにキリストは罪人のために生命を献げたのである、これ實にキリストの十字架の死であつた、彼は自己の死を以て萬民の死に代へ、自己死する故に萬民の生きんことを計つたのである、これ彼の自ら選びとりし十字架の意味であると共に、神御自身が罪人のために其獨子を賜ふて罪人のために十字架の死に就かしたのである、「神われらを（其尚ほ罪人なるとき）愛し、我等の罪のために其子を遣はして挽回の祭物と」したのである、されば「神は之によりて其愛を彰はし給ふ」たのである、即ち罪人の爲のキリストの死は神の愛の著るしき顯彰であるのである。

世に人道上の難問題は少くない、目下の世界問題の如き其一である、併し凡ては人が眞に人を愛するか如何の一點に歸着する、他のために自己を犠牲にして盡さんとの徹底的愛心のある所難問は難問でなくなるのである、しかし此種の愛心は神の愛に感激してのみ起る所のものである、「主は我等の爲に生命を捐て給へり、之によりて愛といふことを知りたり、我等も亦兄弟のために生命を捐つべし」（ヨハネ三の十六）とある如く、キリストの十字架——神の愛のあらはれ——に感激したる處にのみ同胞人類に對する無私の愛は生起するのである、この無私の愛世界に充つるに至れば凡ての難問題は晴れたる日の朝露の如く忽ち消え去るのである。

次に九節を見るに「今その血に頼りて我等義とせられたれば況して彼に由りて怒より救はるゝ事なからんや」

とある、キリストは我等のなほ罪人なる時われらの爲に死に給ふた、其故に我等は罪を赦さるゝに至つた、即ち我等は彼の血（死）によりて義とせられた者である、我等罪人であるにも係らず彼の死によりて既に義人とせられた、然らば既に義とせられて義人たるに至りし我等は彼によりて神の怒（即ち永遠の刑罰）より救はることは當然であらう、かの事すら我等のために爲し給ひし愛の神がそれより容易き此事を我等のために爲し給はぬ筈がない、恰も全力を擧げて重病を治療してくれたる良醫は、それ以後の健康増進——それは治療よりも頗る容易いことである——のために配慮しくるゝこと當然であると云ふに等しい。

十節は九節の反覆ではあるが併しその説き方が九節よりも積極的なに注意すべきである、即ち「もし我等敵たりし時にその子の死によりて神と和ぐことを得たらんには、まして和ぎを得たる今その生けるに頼りて救はるゝことを得ざらんや」とある、九節は罪人たる者が義とせられたるを云ひ十節は敵たる者が神と和ぐに至りしを云ふ、又九節に於て「怒より救はるゝ事なからんや」とあるを十節には「救はるゝ事を得ざらんや」と云ふ、同一事を云ふのに異なる發表を爲せしに注意すべきである。

十一節に曰ふ「たゞ之のみならず我等に和ぎを得させ給ひし我主イエスキリストに頼りて亦神を喜べり」と、九節十節の如く神愛の深さを以て救拯の確實を推知するが爲めに勝利の歡喜は自から生起せざるを得ない、即ち「神を喜べり」は神にありて勝ち誇れりの意である（原語は前講に説きし如くコウホオマイである）、單に怒より救ひ出さるゝに止まらず、救はれて勝ち誇るに至る、漸くサツト救はれたのではない、優に救はれて罪と死に勝ち得て餘りあるのである、そして之は「我等に和ぎを得させ給ひしイエスキリストに頼りて」の事である。

五章一節―十一節は歡喜と勝利の連續である、その傳ふる靈的事實の如何に貴く有難きよ！そして其凡ての根元は信仰に由て義とせられしと云ふ一事に存する、そして是れ己の功によらず専ら神の愛に基づくことである、感謝すべきかな主の恩恵、讚美すべかな、神の榮。

羅馬書第五章の一節から五節は、ある意味において崇高な詩といふべき箇所である。もとよりパウロが専門の詩人であるからではない。およそ偉大な信仰の士は宗教家であつて哲学者であつて、かつ詩人であるからのことである。前講において我々は第四節までをうかがつたのであるが、実は三節から五節が一つの文をなしているのである故、ここですとこの第五節の研究は前講を補足するものとなるのである。

まず五節の初めには「この希望は失望に終わることがありません」とある。これはこの希望が必ず実現されるべきであつて、決して空しい望みに終わらないことを意味するのである。この世の事において人々は種々の希望を抱くのを常とする。しかしながらその希望の多くは実現されずに、その人々はついに恥を抱くに至るのである。あたかも砂漠の谷川を望み慕つたテーマの隊商、シバの旅人がその枯渇しているのに会して「彼らはこれに頼つたために恥を見、そこまでやって来て、辱めを受ける」類である（ヨブ記第六章）。しかしながらキリスト者が迫害を経て練られた品性を生み、練られた品性によつて生まれた希望は決して空しく終わるものではない。かの時に至つて必ず実現成就されるべきものである。この事はキリスト者が自らよく知つてゐるのである。

それなら問う、この希望が空しい望みとして終わらない証拠はどこにあるか。答えて言う、「なぜなら、私たちに与えられた聖霊によつて、神の愛が私たちの心に注がれているからです」（五節後半）と。今これを原意のままに十分に、かつ正確に訳出しようとすれば、左のように改訳すべきものである。

なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれて残っているからである。

「私たちに与えられた聖霊」である。聖霊を与えられたことはキリスト者にとって過去のことである（勿論現在を除外しないけれども）。そしてこの聖霊によって神の愛が心に注がれて今残っているのである。そしてこのことが実にあの希望の失望に終わらないことの証拠となるのである。およそ希望というものはその本性上将来に関わることであるゆえ、いよいよその時が来なくてはこの希望実現の成否を完全に知ることはできない。しかしながら神の栄光を望む希望の確実なことは、キリスト者の魂の上に實際得られた過去現在の心的経験が優にこれを実証しているのである。聖霊が私に降りて神の愛が大水のように激しく我が心に注がれ、その愛が今も留まっていることは、我が心の生きている実験として固より疑い得ない事実である。この事実を一方に抱きながら、与えられた希望の空無として終わろうとすることを他方に思うことは不可能なことそれ自体である。愛を豊かに我に注がれた神が、空しい希望を与えて我々に恥を取らせなさることがあるべきはずがない。神の愛は我々をして彼を信じさせる。彼を信じれば、彼の与えた希望の必ず実現されるべきをも信じなければならないのである。

パウロを嘲る者は彼に向かって言ったであろう、汝は歓喜と希望に満ちている、これは大いに良い、けれど汝の窮乏孤独の実状をいかに、汝は希望に生きると広言してはばからないが、そもそも希望というものはその時にならなくては成否の分からないものであるゆえ、汝の希望もまたついに世に数多くあるそのように空無として終わる者ではないかと。しかしパウロはこれらの言を一蹴し去るかのように、神の愛が豊かに我に注がれたゆえ、我は与えられた希望の必ず実現されるべきを信ずと答えるのである。簡単ではあるが力強い、意味の頗る深い、

多年の経験を圧搾した貴い言葉と言わなければならない。

この意味において信仰は純主観的なものである。与えられたところの聖霊により神の愛を注がれて今も残ることを心において経験するのである。この経験がある以上は、ついに完全に救われて栄化の域に達するべきことを疑おうとしても疑えないのである。かく自己の確信であり、実験であり、純主観のことであるが故に、他からの批評、攻撃、嘲笑の如きは我において何等問題とならない。あたかも岩に向かって放たれた矢の如く、矢はただ撥ね返るより外ないのである。またキリスト教二千年の歴史において、信仰上の迫害が少しも信徒の信仰を乱すことなくして、かえって益々熱心をあおった如きはもとよりそうあるべきことである。

神に救われた証拠は何であるか。ある人は事業の成功であると言ひ、自己の致富栄達をもって救われた証拠とする人がある。信仰の結果として勤勉を生み、ために致富栄達に至る人がないとは言えない。しかしながら詐偽と詭詐とをもって致富栄達に至る人もある。あるいはまた幸運が成功をもたらすこともある。ゆえに救われた証拠をこの世の成功に置くことは大体において誤っている。また健康をもって救われた証拠とする人もある。信仰は健康の源たる心の平和を生む者であるゆえ、救われた証拠である場合もないではない。しかしながら世には無信仰であつても天賦の強健な肉体に溢れるばかりの健康を持っている人もある。また神に救われた者であつても病弱を免れない場合もある。ゆえに健康をもって救われた証拠と見ることは不正確である。その他概ねこの類である。

神に救われた者はこの救いの完成されるべき希望を抱く、即ち栄化完成の希望である。それなら救われた証拠、

また救いの完成の希望の確実なことを証明する証拠は何であるか。これは成功にあらず健康にあらず、その他一切の外部的兆候にあらず、心中深く抱かれるところの聖霊による神の愛の実感である。我々に与えられたところの聖霊により、神の愛が豊かに注がれて今残ることを如実に味わったこと、この実験が最も確実な希望の証拠である。救われたことの証拠であると共に、救いの完成されるべきことの証拠である、即ち希望の確実性を証明する者である。

そしてこの貴い経験は患難即ち迫害を経て来るものである。迫害は忍耐―練られた品性―希望の母であると共に、また神の愛を感じ得る実験を生み起こすところのものである。ここに於いてか患難迫害のキリスト者にとって益々歓迎すべきものであることを知るのである。そして迫害と言えば昔あったいわゆる迫害の類に限らず、信仰のために受ける一切の不利益、苦痛損害、犠牲を指すのである。この種の迫害は今も頗る多い。いや信仰のあるところ必ずこの迫害が伴うのである。しかしながら迫害の結果として希望が生じると共に、また聖霊が降りて神の愛が我に満ち、をもつてこの希望の失望に終わらないことを示すのである。されば歓迎すべきかな、迫害苦難！これは我々の完成されるために是非とも来なければならぬもの、即ち貴い天の使である。

聖霊を与えられて神の愛が来たり留まる。聖霊の我々を導くは即ち聖霊により神の愛が我々に注がれることである。六節以下パウロは進んでなお神の愛の内容を説こうとするのである。まず六節から八節は左の通りである。

- (6) 実にキリストは、私たちがまだ弱かったころ、定められた時に、不敬虔な者たちのために死んでくださいました。  
(7) 正しい人のためであっても、死ぬ人はほとんどいません。善良な人のためなら、進んで死ぬ人が

いるかもしれません。(8)しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに對するご自分の愛を明らかにしておられます。

キリストは罪人のために十字架の死をとられた。これ即ち神の愛である。神の特別の愛がこれにおいて現れたのである。これを人間の社會において見るに、正しい人のためだからと言って我が生命を捧げる者は皆無と言ふべきほど稀である。恵み深い人は正しい人と異なり、慈悲とあわれみをもつて人に対する者である。さればその愛に感激してあるいはそのために生命を捧げる者も少しはあるかもしれない。とは言えもとより稀有のことである。然るにキリストは恵み深い人のために死んだのではない。また正しい人のために死んだのではない。實に罪人のために死んだのである。罪人のために我が生命を与えて罪人に生命を与えたのである。人は己に恵みを施した人のためではなくては生命を与へ得ない。しかしそれすら頗る稀である。然るにキリストは罪人のために生命を捧げたのである。これ實にキリストの十字架の死であつた。彼は自己の死をもつて万民の死に代へ、自己が死する故に万民の生きんことを計つたのである。これ彼の自ら選び取つた十字架の意味であると共に、神御自身が罪人のためにその独り子を下さつて、罪人のために十字架の死に就かせたのである。「神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。」(ヨハネの手紙第一第四章十節)。されば「神はこれによつてその愛を明らかに」されたのである。即ち罪人のためのキリストの死は、神の愛の著しい現れなのである。

世に人道上の難問題は少なくない。目下の世界問題の如きはその一である。しかし全ては人が眞に人を愛する

か如何の一点に帰着する。他のために自己を犠牲にして尽くそうとの徹底的愛心のあるところ、難問は難問でなくなるのである。しかしこの種の愛心は神の愛に感激してのみ起こるところのものである。「キリストは私たちのために、ご自分のいのちを捨ててくださいました。それによって私たちには愛が分かったのです。ですから、私たちが兄弟のために、いのちを捨てるべきです」(ヨハネの手紙第一 第三章十六節)とある如く、キリストの十字架——神の愛のあらわれ——に感激したところにのみ、同胞人類に対する無私の愛は生起するのである。この無私の愛が世界に満ちるに至れば、全ての難問題は晴れたる日の朝露の如くたちまち消え去るのである。

次に九節を見るに「ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいつそう確かなことです」とある。キリストは我々のなお罪人なる時、我々のために死んでくださった。その故に我々は罪を赦されるに至った。即ち我々は彼の血(死)により義とされた者である。我々が罪人であるにも関わらず、彼の死により既に義人とされた。それなら既に義とされて義人たるに至った我々は、彼により神の怒り(即ち永遠の罰)より救われることは当然であろう。かのことすら我々のためにくださった愛の神が、それより容易なこのことを我々のためにしてくださらないはずがない。あたかも全力を挙げて重病を治療してくれた名医は、それ以後の健康増進——それは治療よりも頗る容易なことである——のために配慮してくれること当然であると言うに等しい。

十節は九節の反復ではあるが、しかしその説き方が九節よりも積極的であることに注意すべきである。即ち「敵であつた私たちが、御子の死によって神と和解させていただいたのなら、和解させていただいた私たちが、御子

のいのちによって救われるのは、なおいつそう確かなことです」とある。九節は罪人たる者が義とされたことを言い、十節は敵たる者が神と和解するに至ったことを言う。また九節において「キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいつそう確かなことです」とあるのを十節には「和解させていただいた私たちが、救われるのは、なおいつそう確かなことです」と言う。同一のことを言うのに異なる表現をなしたことに注意すべきである。

十一節に言う「それだけではなく、私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を喜んでいます。キリストによって、今や、私たちは和解させていただいたのです」と。九節、十節の如く神の愛の深さをもって救いの確実を推知するがために、勝利の喜びは自から生起せざるを得ない。即ち「神を誇っている」は神にあつて勝ち誇っているの意である（原語は前講に説いた如くコウホオマイである）。単に怒りより救い出されるにとどまらず、救われて勝ち誇るに至る。ようやくやっと救われたのではない。優に救われて罪と死とに勝ち得て余りあるのである。そしてこれは「我々に和解を与えてくださったイエス・キリストによって」のことである。

五章一節から十一節は歓喜と勝利の連続である。その伝える霊的事実のいかに貴くありがたいことか！そしてその全ての根幹は、信仰により義とされたという一つの事に存する。そしてこれは己の功によらず専ら神の愛に基づくことである。感謝すべきかな主の恩恵、賛美すべきかな神の栄光。